

JA北信州みゆきのグリーン・ツーリズム

JA都市農村交流基礎研修

■JA北信州みゆきについて

長野県の最北に位置する、飯山市、木島平村、野沢温泉村、中野市(中野市豊田地区)、栄村の2市3村を管内に持ち、平成10年12月1日、5JAによる広域合併によって誕生しました。

地域のほぼ中央を千曲川が流れ、JR飯山線・国道117号線沿いを中心にのどかな田園風景が広がります。また、映画「阿弥陀堂だより」のロケ地となり、日本の原風景が残る地域として、脚光を浴びています。

特に飯山市はグリーン・ツーリズムの先進地として知られ、旧JA時代から同市とともに農村都市交流事業を積極的に展開してきました。

北陸新幹線開業を間近に控え一層の発展が期待されています。



いいやま菜の花まつり

5月3日(月)~5日(水)

■北信州の観光産業のはじまり

- ◎農業が基幹産業。昭和30年代までは冬場の産業がなく出稼ぎが中心
- ◎地元農家が中心となり、雪を活用したスキー場が多く造られる
- ◎自宅を改装して冬期間民宿を営む農家が増える
- ◎地域産業に観光が加わる

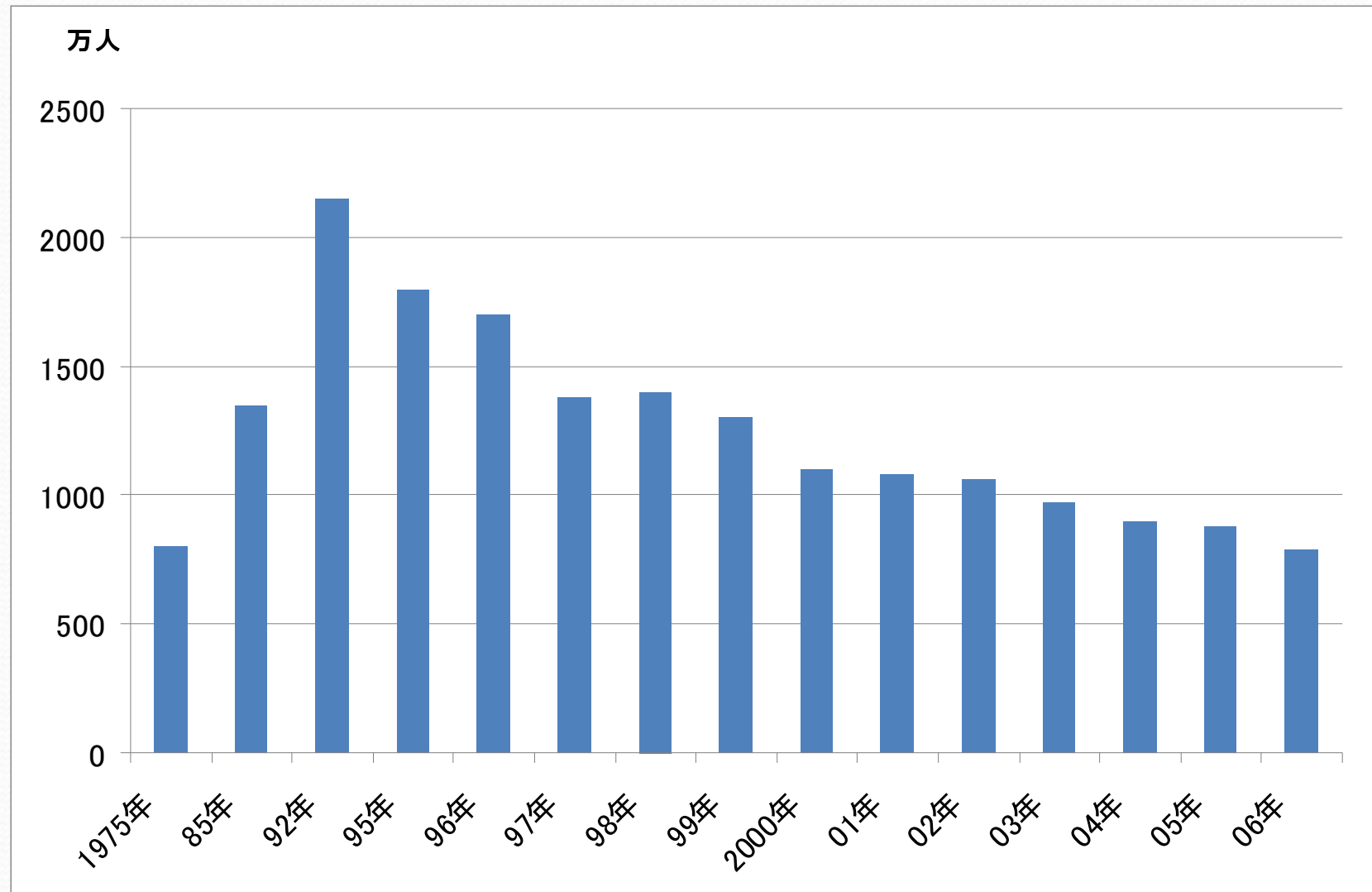
野沢温泉スキー場	開設 1924年
※戸狩スキー場	開設 1960年
※木島平スキー場	開設 1963年
斑尾高原スキー場	開設 1972年
※信濃平スキー場	
※北飯山スキー場	
※小境スキー場	
飯山国際スキー場	

(※印 農家が中心となって造られたスキー場)

野沢温泉村については、その名の通り温泉街があり、古くから観光の村であった。スキー場もJA管内で最初に造られた。



■長野県のスキー場利用者数(県まとめ)



■JAのグリーン・ツーリズム取り組み経過

農村がいちばん美しく活気のある季節に訪れてもらおう

- ◎当時の農協では「観光と農業」を地域経済の柱として位置づけ、**農協から地元観光協会へ職員を派遣**
- ◎昭和63年頃、農協間交流開始。名古屋市の農協（現JAなごや）と提携「夏休み子ども村」が始まる
- ◎平成5年、**飯山市がグリーン・ツーリズム事業のモデル地域に指定される**。行政・JA・地元観光協会が中心となり、全国に先駆けて「飯山市グリーン・ツーリズム推進協議会」を設立
- ◎平成7年、生協版グリーン・ツーリズム「グリーンライフ」が立ち上がる。**日本生協連が当地域を全国のモデルケースとして選定**
- ◎平成14年、（社）全国農協観光協会が企画する「快汗！猫の手援農隊」と連携。**りんご総採り援農ボランティアがスタートする**
- ◎平成18年にりんご葉摘み援農、平成21年にジュース用トマト収穫援農を開始（独自企画）

■JAが取組む援農ボランティア（りんご・トマト）

【目的】

- 農業の活性化
 - ①農家の高齢化対策
 - ②農繁期の人手不足解消
- 生産者と消費者の交流
- 北信州のファンづくり
- 観光業の活性化

【参加者】

- 都市住民（主に首都圏）
旅費・宿泊費自己負担



観光ではなく“ほんもの”の農業・農村体験の提供

農家の苦勞

作物愛着



収穫の喜び

自然環境

北信州（農業・農村）の良き理解者

応援

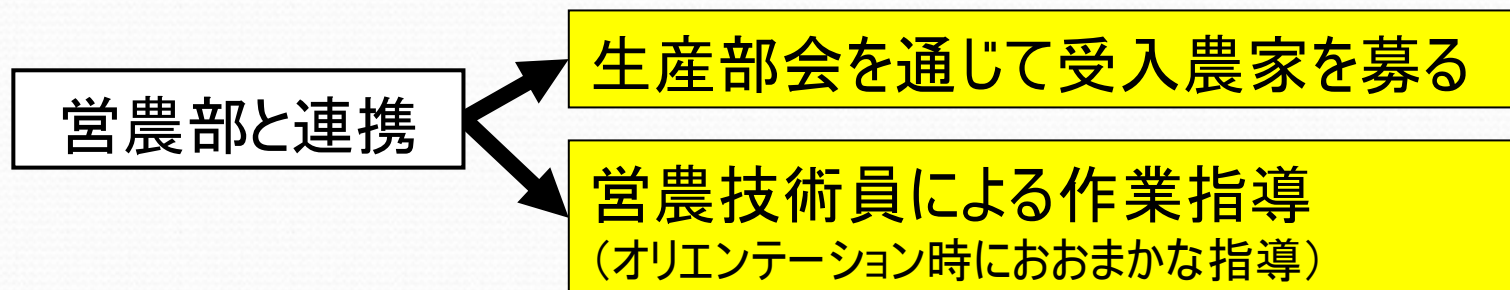


第2のふるさと

農家のやる気・北信州農産物の購入・定住

■現地事務局の主な対応

○受入農家の選定および作業指導の手配（りんご・トマト）



※受入農家の選定には営農部との調整が必要。また他部署にも活動を知ってもらうため。

○作業期間の設定（りんご・トマト）

3月に受入農家と協議。

【平成22年りんご援農計画】

摘果	5月28日～	6月13日	計4班
葉摘み	10月1日～	10月11日	計3班
収穫	11月12日～	11月28日	計5班

○宿の手配（りんご・トマト）

地元観光協会と連携

→ 公平な宿選定を図る

- ・宿が偏らないように協会を通じて選ぶ

○交流会の手配（りんご）

参加者（消費者）と農家（生産者）の交流及び産地のPR。
摘果・収穫援農第2日目に開催。全参加者・農家が集う。
地元温泉施設との調整。

○行政等との連携

中野市

→ 行政補助事業の活用

信州いいやま観光局

→ 受付窓口（葉摘み・トマト）

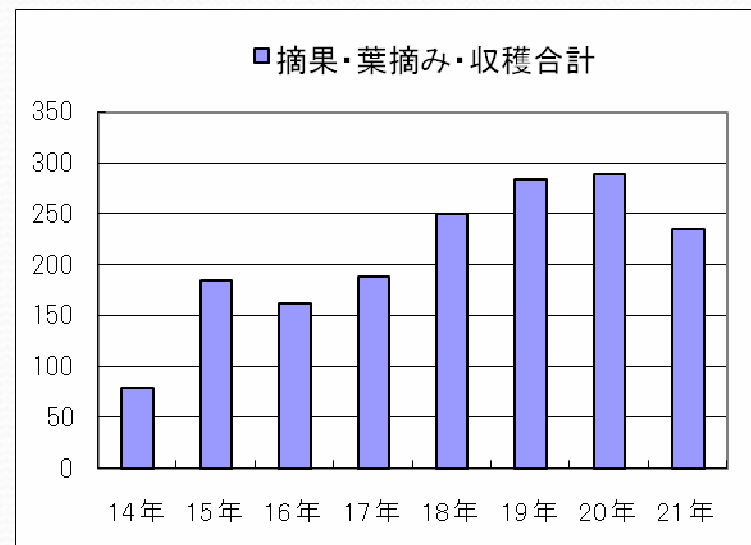
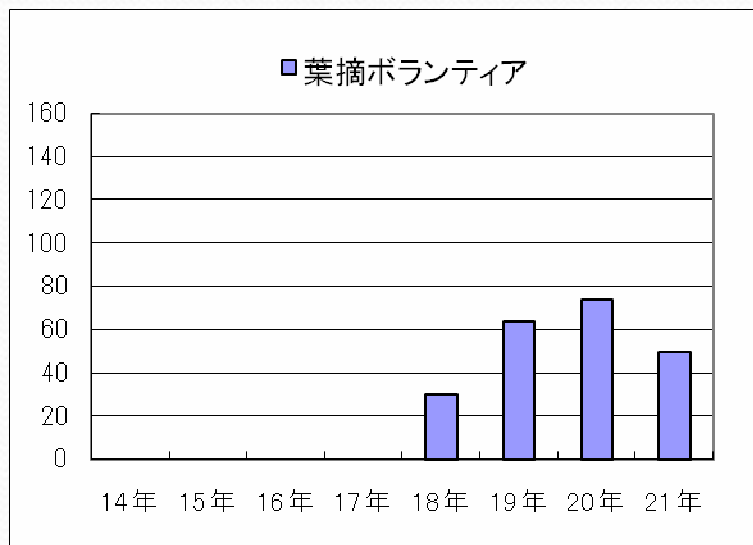
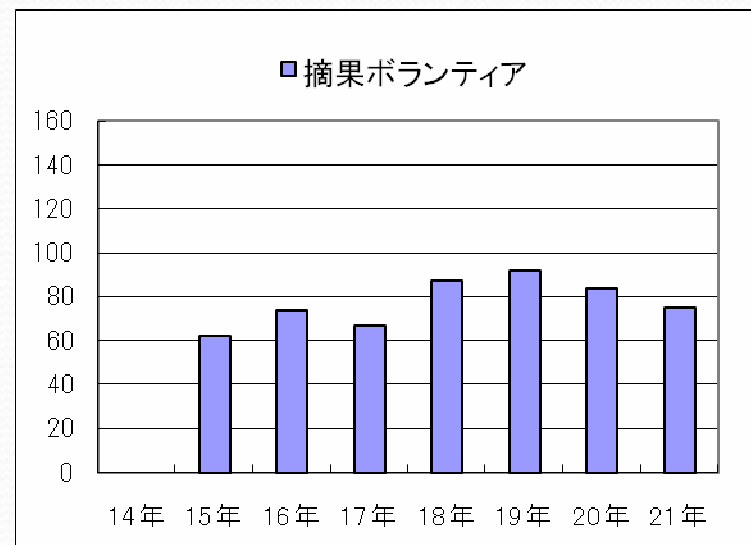
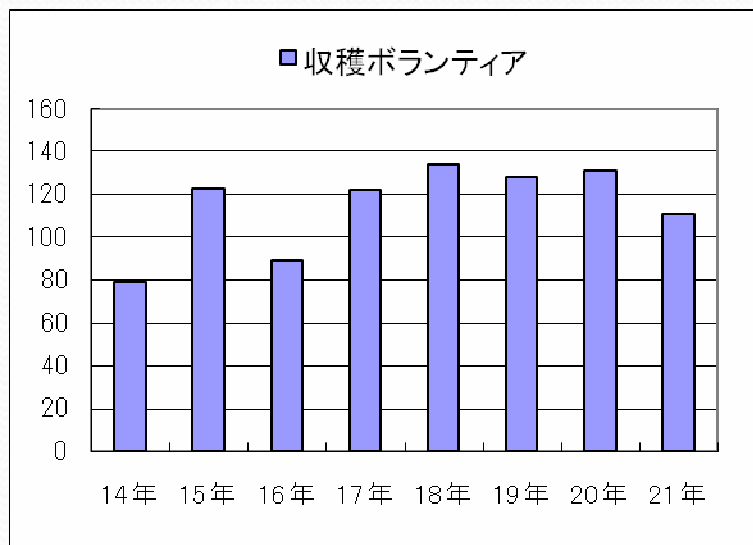
- ・行政等と連携することで、参加者が一層安心できる

○平成22年度役割分担（りんご）

	実施項目	社団	農家	JA	宿
募集 関連 全般	参加募集・参加者管理	○		○	
	参加者への案内	○			
	参加者名簿・メッセージ等のJAへの連絡	○			
受入 関連 全般	受入農家の手配・調整・連絡			○	
	宿の手配・調整・連絡			○	
	交流会の手配・調整・運営			○	
	オリエンテーションの設営・運営			○	
	名札の作成			○	
	集合・出発時間の徹底		○		○
	集合・出発人数確認		○		○
	緊急連絡網の整備			○	
	アンケートの作成	○			
	アンケート・名札の回収			○	
活動写真			○		
社団との連絡			○		

■援農ボランティア参加者数

実施年	泊数	りんご摘果		りんご葉摘み		りんご収穫隊		ジュース用 トマト収穫		参加者 累計	参加者 泊数
		参加者	受入 農家	参加者	受入 農家	参加者	受入 農家	参加者	受入 農家		
14年	2泊					70	15			70	140
	3泊					9	2			9	27
15年	2泊	62	19			91	33			153	306
	3泊					32	9			32	96
16年	2泊	54	17			67	20			121	242
	3泊	20	6			22	6			42	126
17年	2泊	48	18			94	27			142	284
	3泊	19	6			28	7			47	141
18年	2泊	64	18	19	12	100	29			183	366
	3泊	23	6	11	6	34	7			68	204
19年	2泊	62	21	64	24	97	31			223	446
	3泊	30	9			31	11			61	183
20年	2泊	58	23	74	27	101	31			233	466
	3泊	26	11			30	12			56	168
21年	2泊	57	20	42	16	97	37	19	3	215	430
	3泊	18	9	8	3	14	6			40	120
合 計		541	183	218	88	917	283	19	3	1695	3745



■援農ボランティア参加者・受入農家の声

参加者

- ◎高齢化が進んで大変だと思いました。若い方は外に働きに出ているのが現状。でも生活のため仕方ないことと思う。農業だけで生活が成り立つように政府は考えてほしい。
- ◎政府や自治体がもっと力を入れ、食料の自給率アップに力を注がねば、都市も農山村も自滅への道を辿ることになる。援農は色々なことを考えさせられる機会となっている。
- ◎今回初めて収穫を体験しましたが、小さかったり色むらや多少のキズのあるリンゴも目につきました。味はまったく変わらないのに見てくればかり気にする消費者に、完璧なものが如何に難しいか知ってもらえたらよいと思いました。
- ◎後継者が希望をもって続けていけるよう、また生産物の品質向上の努力が報われるように消費者として支えられたらと思います。

受入農家

- ◎ 恥ずかしい「りんご」を作れない。気が引きしまる。
- ◎ 年齢もあり樹を切ろうと思ったが、援農参加者から「私たちが毎年来るから切らないで」と言われた。今も続けてりんごを作っている。
- ◎ 最初は心配（作業態度等）したが、援農隊が来てくれ、現状規模を維持できている。＜若手農家は、規模拡大＞
- ◎ 援農参加者と話すことで、地元の良さ（自然環境等）を再確認できた。

品質向上・りんご作りへの誇り・産地維持

■現状・課題と対策

現状・課題	対策
参加者の多くは60歳代でリピーターが多く、作業が分かり融通が利く反面、参加者の高齢化が進む。	■新規参加者の獲得 JA長野中央会でメルマガを3万件配信している。本年度、援農ボランティアを紹介する予定。
参加者からの農家指名が多く、農家・日程が偏る。	■受入態勢の整備 受入農家協議会を立ち上げ、会議の中で話し合いバランスよく受入れられるようにした。参加者にも指定どおりいかない場合がある旨を知らせた。
受入農家の固定化。(23農家)	受入りたいが「昼食を出すのが面倒」と感じている農家が大勢いる。「おむすび」など簡単な昼食でよいと言っているが… 交流・産地PRの場として前面に出す
雨天時の対応	農家ごとに対応が違う。畑に行く農家、室内で作業する農家、お茶飲みをする農家さまざま。 現状では仕方がないか…

■JAを取り巻く経済効果（まとめ）

